

関原彩 『心学早染草』善玉悪玉の影響―寛政から文化・文政まで―

『学習院大学国語国文学会誌』五十八号、二〇一五年三月

【正誤表】

正誤表		
65 下段	頁	
14	行	
『黄表紙年表』	誤	
『歌舞伎年表』	正	

# 『心学早染草』善玉悪玉の影響

—寛政から文化・文政まで—

関原彩

はじめに

山東京伝作の黄表紙『心学早染草』（北尾政美画）は、寛政二年（一七九〇）に大和田安兵衛より刊行され、京伝の代表作の一つとして知られている。主人公の善と悪の心を擬人化した善玉悪玉は、丸い顔に「善・悪」の文字を配し、上半身裸の禪姿という特徴的なキャラクターとして描かれている。

本稿では、『心学早染草』の影響下に作られた、善玉悪玉が描かれた作品を収集し、時代毎にその特徴を考察するため、寛政から文化・文政までの浮世絵と戯作、歌舞伎について見ていく。

なお、善玉悪玉の影響下の作品を集めるにあたって、そのキャラクター像は、①頭部が丸で描かれていること、②丸の中には文字が書かれていること、③着衣の有無や種類は問わないこと、とする。

## 第一章 浮世絵

栄松齋長喜の描いた「遊廓善玉悪玉」（蔦屋重三郎板、間判三枚続き）という作品がある。寛政三年頃から同七年頃までの長喜と名乗っていた時代に、面長のおだやかな容姿を持つ独特の美人像を描いており、本作もその一つで、長喜の錦絵の代表作とされている。遊女の部屋で客と遊女たちの渦巻く心の様子を、周囲に善玉悪玉を配置することによって表現している。

画面右側にいる客の男性は左手に一枚一分に替えられる紙花を持ち、黒の羽織を着た男芸者に与えようとしている。悪玉が男性客の胸から、丸の中に「心」の文字が書かれた心を引き出して抱えている。善玉は、その悪玉の腰に差している刀を引き出し、止めようとしている。もう一人の善玉は、両手を上げて紙花を渡そうとしている腕を止めようとしている。しかし、善玉より遙かに多くの悪玉が、男の周りで扇子を持って囃し立てたり、男芸者の両手を掴んで紙花をもらおうと仕向けている。

これらの描写から『原色浮世絵大百科事典』では「この絵は酒興の席も済んで床入へと移る頃の設定とわかる」と解説している。<sup>注1</sup>確かに画面右側には赤い布団が置かれており、その布団から悪玉が二人出てきているので、床入前の光景を描いているように思われる。客の背後と画面左側には、立ち姿の女郎がおり、髪型や髪飾りの数の違いで遊女の格の違いが表されている。火鉢の前では、手紙らしき紙を火にくべようとする遊女がいるが、彼女と話をしている芸者の周りにも悪玉がいることから、悪い方向へと唆しているのかもしれない。

画面左側では、禿は三味線箱に寄り掛かり、三味線の棹を拭く芸者と遊女は話をしているようである。三味線箱の上では悪玉が正座していたり、箱の横で頬杖をついて寝そべり、客が紙花を配る様子を眺めている。部屋の左奥にある長持の上では、袴を着た悪玉が長い手紙を読んでおり、女郎から客への無心状かと思われる。部屋の中には床の間に花器やお茶の風炉、「古今集」、「歌書」と書かれた書物の箱が並び、遊女の教養を示している。このように遊郭の様子が細かく描かれていることから、本作は「遊郭風俗を知る上で貴重な一点といえるものである」と賞されている。<sup>注2</sup>長喜の得意とした美人画において、画面の至る所で好き勝手に動く悪玉が見どころである。

また、右とほぼ同時期に成ったと考えられるものとして、遊郭内部の様子ではなく、屋外を歩いている光景を描いた長喜画の「吉原の善玉悪玉」（蔦屋重三郎板、大判三枚続き）もある。<sup>注3</sup>吉原の大門の前で提灯を持った茶屋の男を先頭にして、遊女と

客が歩く花魁道中である。吉原の遊女は、昼は張見世で手紙を書いたり、客がいた場合には座敷で相手をするが、昼見世が終ると暮六つ（十八時頃）から夜見世となる。花魁道中は、この時刻に客に呼ばれた全盛の遊女が、多くの下級遊女や禿などを引き連れて仲の町の引手茶屋に客を迎えに行くことをいう。

向かって左側にいる黒い頭巾を被った男は、妓楼へ向かおうとしており、客の男の周りには多くの悪玉がいる。画面中央には、菊模様を着物を着た花魁、禿や下級の遊女らが客の後ろを歩いている。遊女の足元にも悪玉たちが連れ立っている。善玉は止めようとしたようだが、拳を振り上げている悪玉を前に弱腰である。画面右側の、「門」と書かれた提灯が下がっている門の前では、黒の長い羽織を着た男性の右手を悪玉が、左の着物の袂を善玉が引つ張っている。行こうか行くまいかと心の葛藤を描いており、大門の外へ出そうと肩を引つ張る善玉もいるが、茶屋の男や遊女は、この客を引きとめようと声を掛けている。このように善玉悪玉が両手を引つ張り心の葛藤を表現している図は、『心学早染草』（九ウ十オ）以来よく描かれる図像である。背景には、赤い毛氈が敷かれた引手茶屋が描かれている。悪玉が乗る天水桶には「仲〇町」と書かれており、この場所が吉原の大門をくぐった正面に伸びるメインストリートであることがわかる。

『心学早染草』九ウ十オの場面の、『新編日本古典文学全集』の頭注の絵の解説には、「理太郎を引つ張り合う善魂と悪魂。この場面が栄松斎長喜によって三枚続きの錦絵となっている」

とある。<sup>注4</sup>この解説だけでは、長喜の何の作品を指すかは判然としないが、両手を引つ張る場面が描かれていることから、この「吉原の善玉悪玉」を指すのではないかと考えられる。

長喜の描いた善玉悪玉の錦絵について、『山東京伝一代記』(山東京山著か、成立年代未詳)には、以下のような記述がある。

善玉悪玉(初二三)合巻にして袋入にて売し(是合巻の初なるか)又初編中の巻、吉原妓楼の所を三枚続のにしき絵に長喜画がき出板す、是草ぞうしの巻を大にしきゑの初めなる。<sup>注5</sup>

この合巻としてという記述は、文化元年(一八〇四)頃から始まる合巻のことではなく、合冊してあることを指している。『心学早染草』は初め大和田から出されたが、その後板木は榎本屋、そして最終的に葛屋重三郎のもとに渡った。再板が繰り返され、馬琴作の四編目『四遍摺心学草帛』が出される際に、合綴し袋入り本で出されたようである。この「初編中の巻、吉原妓楼の所」は、『心学早染草』七ウ八オの理太郎が吉原で遊び、悪玉が扇子を持って踊っている場面を指すのではないかと思われる。長喜の三枚続き錦絵で知りえたのは現在のところ先に挙げた二点だが、『心学早染草』を参考として、「遊郭善玉悪玉」は吉原で遊ぶ場面、「吉原の善玉悪玉」は両手を善玉悪玉に引つ張られる場面を描いたのだろう。

さらに、長喜は柱絵(「後朝」)にも善玉悪玉を描いている。成立年代未詳とされているが、「長喜画」との署名から寛政三年から七年頃の作かと思われる。<sup>注6</sup>後朝の様子を描いているもの

だろうか。少し髪の乱れた姿の女性が男性の帯を結ぼうとしている。帯の端を二人の善玉が持って、結ぶのを手伝おうとしている。一方、屏風に掛けてある着物と共にぶら下がっている悪玉は、もう少し長居しよう、と男性に言っているように見える。二人の間柄は不明であるが、男の方が若く、女性の方が年上のように見える。足元には布団が敷かれ、枕が置かれている。『原色浮世絵大百科事典』には、「善玉悪玉」という項目があるが、作例の中に長喜の柱絵と書かれており、この作を指していると考えられる。<sup>注7</sup>

長喜以外の例も挙げよう。遊郭を舞台にした錦絵に、鳥文齋栄之が描いた「栄之遊郭之図」(岩戸屋喜三郎板、大判三枚続き)もある(図1)。制作年は極印のみでは確定しがたいが、ボストン美術館では寛政五、六年、キョツソーネ東洋美術館とジェノヴァ東洋美術館では寛政三、四年としている。<sup>注8</sup>三枚続きで遊郭を舞台にした美人画ということは長喜とも共通しているが、異なる点は、絵の中に善玉悪玉のセリフと遊女たちの名前が書かれているところである。

画面右側には、縞の着物を着た客の男が酒肴を盛った盆や膳を前に腰を下ろして、右手に盃を持っている。隣には「喜瀬川」と書かれた遊女がいて、客と話をしている。頭上には悪玉たちが「しめたぞくくありやサドふせい」と囃している。その背後に立っているのは右から赤い着物の「宮川」、緑の地に波模様を着物の「松風」で、二人は遊興を終え座敷を出ようとしているようである。その横には、黒の着物の「女けい者いつ花」



図1 鳥文斎栄之画「栄之遊郭之図」国立国会図書館所蔵

が三味線を膝に乗せて手を止めているが、赤い着物でこちらに背を向けている「女げい者いつとみ」は三味線を鳴らしている。男性客は遊女に肩を触れられて額に手をやっているが、その隣では、善玉たちが「今夜帰らつしやらんと、大旦那はもふ帰らふと言わつしやるだろふ」「なに、しろ中ノ町まで出しもふしでの事がよかるふ」と話している。その上で悪玉が「旦那を寝せもふして、おいらもかしくてもいかふ、ア、豪気にくたびれたぞ」と言っている。男の肩には善玉が元の心を取り戻して欲しいとはかりにしがみ付き、「ぬくくくく、悪玉はにくいやつだ」と言う。座敷中央に立っているのは遊女「瀬山」である。三味線を弾くいつとみの横でも、善玉と悪玉の攻防が見られ、いじめられている善玉は「どふぞお帰りなさりました」と言っているが、悪玉は「善玉輩を追返しわが心まかせにあすばせてくるよう」と返す。画面左側で黒の羽織に煙草を持っているのが「男げい者萩江藤吉」、見返り姿の遊女「川のと」、緑の雪華紋の着物の「川すみ」、彼女から煙管を受け取る「うき船」がいる。男芸者の斜め前に座っている悪玉二人は、「もふ帰るきつ口がない、あゝ骨を折つた、くつておけ、しゃんく、モヒトツかへし、しゃん」と話している。腕飯振舞の態に、善玉は早くお開きにさせようと拝み頼んでいるが、反対に悪玉は扇を振って盛んにあおりたてており、客の心の様子を善玉悪玉が表している。また、善玉はみな着物を着て描かれていることも長喜作品とは異なる。彼らのセリフの中には、善玉、悪玉と書かれているため、既にこの呼び名で定着していたことも窺える。

## 第二章 草双紙

この「栄之遊郭図」は遊女の名前が書きこまれていることから、遊郭松葉屋が店の宣伝のために制作を依頼したのではないかとということが指摘されている。<sup>注10</sup>寛政三年春刊の『吉原細見』には、「松葉屋半左衛門」の店に「喜瀬川、瀬山、川のと、川すみ、みや川」の遊女の名が見え、男芸者之部には「秋江藤吉」、女芸者之部には「いつ富、いつ花」の名が確認できる。「松風」は寛政四年春から、「浮船」は寛政五年春からその名が登場し、女芸者の二人以外の名前は寛政五年春に見ることができるところが、寛政七年刊の『吉原細見』に見えるのは「松風、川すみ、みや川、秋江藤吉」のみとなっている。このことから「栄之遊郭之図」は、寛政五年前後の板行ではないかと推察される。

なお、三枚続きの錦絵で、遊郭を舞台に善玉悪玉が人物の周りに描かれた作品は、その後幕末に歌川芳幾によっても描かれた。

寛政期の美人画の特徴は、『心学早染草』の遊郭の場面を舞台にして描いていることである。遊郭にいる者たちの心中を、善玉悪玉によって表現している。また、天保の改革では遊女を描くことが禁じられたが、この時代は問題のない画題であったことも付け加えておこう。長喜の三枚続きの作はいずれも鳶屋から出されていることから、『心学早染草』の人氣に乗じて出されたか、もしくはシリーズ二作目『人間一生胸算用』以降は鳶屋が板元であることから、これらのシリーズが出された際に共に売られた錦絵なのではないかと思われる。

京伝は寛政二年の『心学早染草』によって善玉悪玉を世に出し、翌年の『人間一生胸算用』でも序盤に善玉を登場させている。続く寛政五年には、再び善玉悪玉が活躍する『堪忍袋緒々善玉』が出された。その後シリーズ四編目は馬琴作となり、これ以降京伝の手によって善玉悪玉が登場する作品が書かれることはなかった。しかし京伝は、その後も顔に他の文字を入れたキャラクターは黄表紙の中で描いている。

『人心鏡写絵』(京伝作、寛政八年刊)は、人の心の中を写す鏡を胸の部分に描いた作である。十ウの場面では、遊郭に行きたいと思っている男の胸の鏡に、「心」の顔の遊女と遊ぶ己の姿が描かれている。<sup>注11</sup>

『仮名手本胸之鏡』(京伝作、歌川豊国画、寛政十一年刊)は、手鏡の中に「仮名手本忠臣蔵」の舞台図を描き、それに当てはめた日常の様子を描いた作であるが、「心、堪、忍、色、まこと、ぎり」などの様々な言葉を顔に書き入れて登場させている。彼らはそれぞれの場面に応じた着物を身に着けている。「破忍之鏡」と題した四ウ五オには、鏡の中に塩谷判官が高師直を斬りつけている場面を描き、本文には、堪忍袋の緒が切れれば、身を守っていた堪忍が立ち去ってしまい、身を滅ぼすと書かれている。絵は、堪忍袋から顔に「堪、忍」と書かれた者たちが出て行く様子と、男の「心」が体を離れ、刀で男の体を刺しているところを描く。



図2 『五体和合談』10丁表  
東京都立中央図書館加賀文庫所蔵

『鬼殺心角樽』（京伝作、北尾重政画か、寛政八年刊）は、頭に「酒」「餅」と書かれた禪姿の小人、酒の神と餅の神が登場する作で、餅の神を善玉、酒の神を悪玉に置換した『心学早染草』以来の垂流作と言われている。この酒の神に交じって、顔に「心、気、雨、湿」などの文字を入れたキャラクターも描かれている。三ウ四オは、病にかかりやすい五月雨の時期に、酒の神の徳によって「雨、湿」が追い払われているという場面である。

『五体和合談』（京伝作、歌川豊国画、寛政十一年刊）でも、頭に「頭、ぼんのくぼ」など様々な言葉をつけている者たちが話を展開させていくが、その中に顔に文字の書かれた善玉悪玉

のキャラクターも用いられている。顔に「痺」と書かれているキャラクターが、「頭」と書かれた男から出ている紐を引っ張っているが、これは足の痺れが頭痛をもたらししていることを表わしている（図2）。「痺」が頭の筋を引きずり出して、頭痛を起こしており、「ぼんのくぼ」と書かれた女房が介抱している図である。

『三歳図会雑講釈』（京伝作、寛政九年刊）七ウ八オでは、擬人化された鼻、手、足袋は頭部がそれぞれの物の形に描かれているが、口と耳は丸い顔に「口、耳」と書かれた姿で表現されている。

『凸凹話』（京伝作、北尾重政画か、寛政十年刊）十四ウ十五オでは、「春、秋」顔の旅人、「日、月」の飛脚が描かれている。

京伝以外の戯作者たちも、『心学早染草』の影響を受けて、善玉悪玉や顔に他の文字を入れたキャラクターを自らの作に取り入れるようになった。唐来参和作の黄表紙『人命』<sup>注12</sup>（北尾重政画、寛政五年刊）は、登場人物の周りに、丸に「心」の字が書かれた者たちが物語に一貫して描かれている。話の筋は浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」であるが、本書の特徴は人物の台詞と共に心の内を文章として添えていることである。<sup>注13</sup>「心」と書かれた顔の小人たちは、京伝の描く禪姿の善玉悪玉とは異なり、着物を着ている。心情を表わしている人物と同じ衣装を着ており、例えば三ウ四オの高師直を塩谷判官が斬りつける場面（図3）では、塩谷判官には着物に「判」と書かれた者、止めに入っ

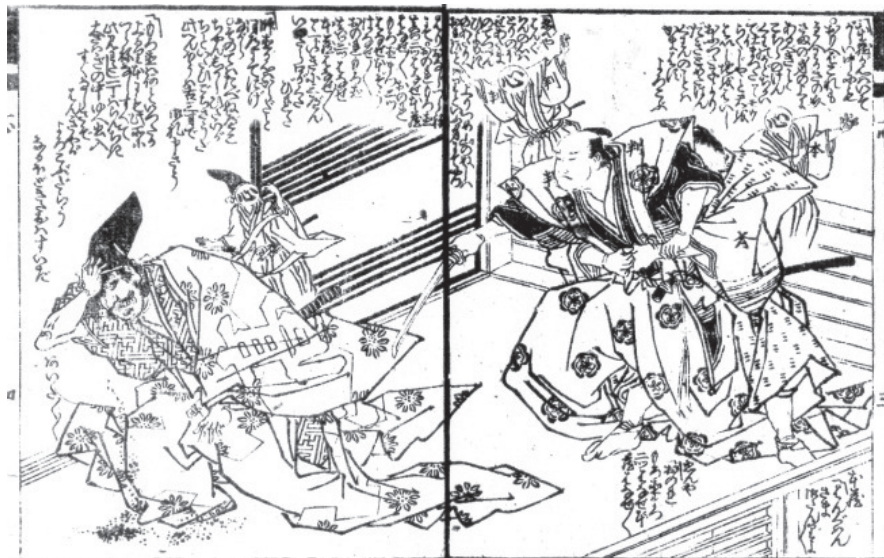


图3 『人唯一心命』 3丁裏4丁表  
 東京都立中央図書館加賀文庫所蔵



图4 『腹鼓臍嘶曲』 3丁裏4丁表  
 東京都立中央図書館加賀文庫所蔵



ている加古川本蔵には「本」と書かれた者、高師直には同じ鳥帽子をかぶった者がついている。

樹下石上作の黄表紙『旨趣向棚牡丹餅』（北尾政美画、寛政六年刊）では、二ウ三オに「金」「銀」と顔に書かれたキャラクターが登場する。これは天上界で遊びすぎたという金星と銀星で、旅の姿をして天上界から下界に降りるところである。下界に降りた後は、擬人化されたキャラクターではなく、金銀の文字が入られた丸に雲をまとった形で表現されている。

式亭三馬作の黄表紙『腹鼓臍囉曲』（歌川豊国画、寛政十年刊）では、化物たちが意趣返しに人間たちを化かすという筋の中で、近年流行の草双紙を手本として人を化かさん<sup>注14</sup>として、悪玉を登場させている。「当時は都合の悪魂、鼻のひしやげた色男などがどふか、人の怖がりそふなものゆへ」と思い付くところなどに、この頃の黄表紙の流行が示されているという。三ウ四オは、狐が悪玉に化けているところで、頭は張りぼてで出来ており、よく見ると狐の尾が出ているというところが面白い（図4）。

善玉悪玉の頭の素材を趣向とした作は他にもある。十返舎一九作画の黄表紙『油断敵薬功能書』（寛政八年刊）では、小人が活躍する話の中で十二ウ十三オに善玉が登場するが、小人が善玉の頭をかぶるといふ趣向で用いられている。

十返舎一九は顔に様々な文字を入れて、自らの黄表紙の中で描いている。『垣覗本草盲目』（一九作画、寛政八年刊）では、十ウから十三オまで顔に三升と「艾」が書かれた禪姿のキャラ

クターが出てくる。あらずじは、疫病神が遣わした風の神によって、人間の間では風邪が大流行してしまうが、伊吹山の艾が灸を据えることで、風の神は追い出されるといふものである。艾の字と共に三升の紋が書かれているのは、団十郎艾、三升艾などの艾を売っていた店が商標に三升を用いていたためではないかと考えられる。

『三輔待為運次第』（一九作画、寛政十年刊）の十一オは、心の迷いを「心」の顔のキャラクターで表わしている。本文に「心はいくつにも分かれて、あつちへ行つたりこつちへ来たり、まごぐくしている」とあるように、三人の心がそれぞれ違う方向を向いており、主人公の迷いの心を表現している。

『運開大黒傘』（一九作、寛政十一年刊）は、丸に「運」と書かれた顔の神が活躍する話である。大黒天に祈願したことで運が開いていく様子を、この運の神の働きによって描いている。『鳩讀試札者笑宴』（一九作画、寛政十一年刊）の十二ウ十三オの場面では、顔に「アキレ」と書かれた禪姿の者二人が挨拶をしている。行過ぎた礼儀を尽くした世界を描いている。

『屈伸一九著』（一九作、享和二年（一八〇二）刊）は、一九自身を主人公として、黄表紙の趣向に行き詰まっているところを物語の発端としている。「智」も逃げ出してしまい（八ウ九オ）、残った「地口・差札・方言・序」が黄表紙の趣向を相談する場面（図5）で、それぞれ顔に言葉が書き込まれて用いられている。

『心学早染草』のシリーズ四編目として蔦屋から出された

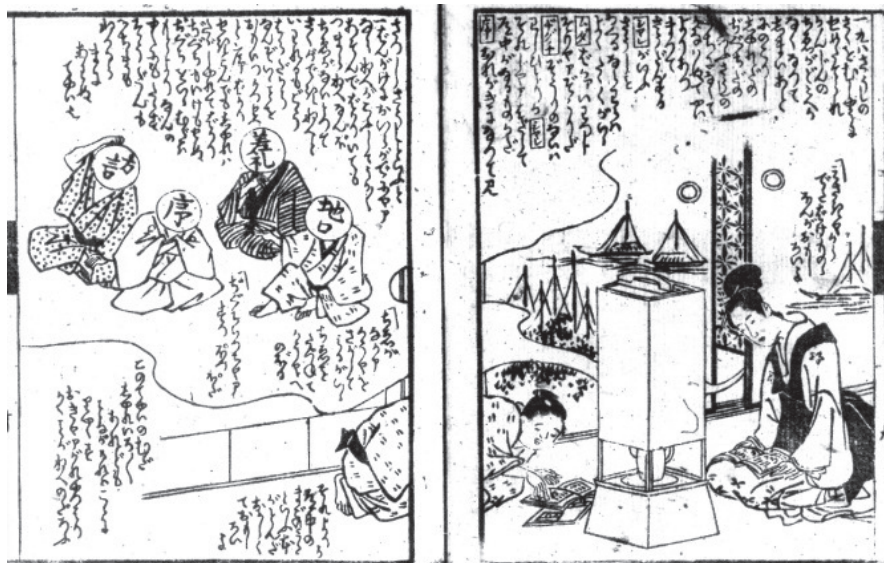


图5 『屈伸一九著』9丁裏10丁表  
 東京都立中央図書館加賀文庫所蔵

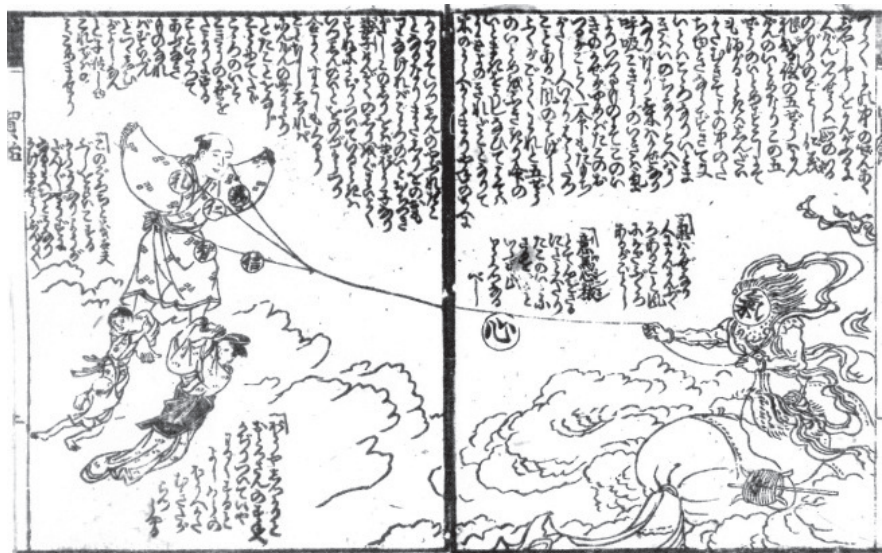


图6 『買飴紙鳶野弄話』1丁裏2丁表  
 東京都立中央図書館加賀文庫所蔵

『四遍摺心学草帑』（寛政八年刊）は、京伝に代り、弟子の曲亭馬琴によって書かれた。本作で馬琴は善玉悪玉の話ではなく、顔に「凶、色、欲、金」などの様々な文字を入れた禪姿のキャラクターを描いている。その後、馬琴は他の黄表紙作品でも、内容に合った文字を顔に入れて登場させた。

黄表紙『鼻下長生薬』（馬琴作、北尾重政画か、寛政十年刊）一ウ二オでは、顔に「欲」と書かれたキャラクター二人が、命の字を鉋や手斧で削っている様子が描かれている。これは「酒色命を削る」という諺を絵解きしたもので、遊郭で酒を飲みたいという欲が、命を削っていることを表わしている。

『足手書草帑画賦』（馬琴作、北尾重政画か、享和元年刊）では、手足が擬人化され騒動を起こす話の中で、四ウ五オに「心」と書かれた顔のキャラクターが登場する。手足の擬人化は、頭に手と足の形を乗せることで表わしているが、「心」は顔に文字を書き入れることで表わしている。手足に比べ、心というものを画像で表わしづらかったために、善玉のキャラクターが用いられたのではないだろうか。

馬琴は人だけでなく、動物や神仏にも丸い顔に文字を書いたキャラクターを用いた。『彼岸桜勝花談義』（馬琴作、北尾重政画、寛政十一年刊）では、地獄と極楽を見立てて、渡世の用心を講釈するという内容だが、頭に角が生えた「心」の顔をした鬼（二ウ三オ、十一オ）や、「煩・悩」と顔に書かれた犬が登場する（八ウ九オ）。

『買餠紙鴛野弄話』（馬琴作、北尾重政画か、享和元年刊）は、

尻尽くしの見立ての中に、「気」の顔の風神や（図6）、「悟」の顔の仏などが尻を揚げている様子（五ウ）を描く。

南柚笑楚満人作の黄表紙『告子之艶男』（歌川豊広画、享和二年刊）は、女性にも過ぎて困ってしまうという話の中で、十三ウ十四オに顔が「思」という字の娘たちが列をなして主人公に会いに行く場面がある。主人公の男への思いの深さを、この「思」の顔で表している。

草双紙ではないが、洒落本にも善玉悪玉が描かれた例が見られる。洒落本『善玉先生大通論』（百川堂灌河作、享和元年刊）は、善玉悪玉の構想を借りたもので、善玉先生が心学講釈のよう到大通論を披瀝するという趣向をとっている。冒頭一卷一ウの挿絵には、善玉先生の周りに、話を聞く悪玉や「通」「粋」と顔に書かれたキャラクターも描かれている。本作の板元は、大坂の大野木市兵衛、京都の三木安兵衛と、作者の百川堂灌河こと吉田新兵衛であり、上方で出版されている。寛政頃頃から江戸で出版された板本は、販路を拡大して大坂などの上方で出版されるようになっていった。例えば、『絵本東土産』は京伝の作品を含む黄表紙集で、享和年間に上方で出版された例であり、三編目以降は吉田新兵衛が板元として名を連ねている。善玉悪玉は江戸に限らず、上方でも知られたキャラクターとなっていたことが想像される。

『心学早染草』の出された寛政期から享和年間にかけて、多くの黄表紙に善玉悪玉のキャラクターが描かれてきたが、文化年間に入ると一旦善玉悪玉の流行は下火になるようである。京



図7 『山洞流悪玉狂言』1丁裏2丁表  
名古屋市蓬左文庫所蔵

伝の弟の山東京山は合巻『二人若衆対紫色』（勝川春亭画、文化十四年刊）の序文一ウ二オにおいて、寛政年間頃までに流行った草双紙のキャラクターである、見越入道や猫、フグの女中、『江戸生艶氣樺焼』の艶二郎、そして悪玉を登場させている。注16  
彼らは口々に、この頃は仇討ちものばかりが流行っているが、自分たちを再び草双紙に登場させてくれと京山に頼むのである。悪玉の親分は「わつちも昔の草双紙じゃア人にも忘られた悪玉善玉」と自己紹介し、「戯作く」と流行る時にや無性においらを使ひたて、敵討ちが流行るやいなや、天気い、高足駄投げ込んでおく事アねへせ。へぎ屋ののこぎりじやアあるめへし、あんまり立て引きのねへ男だ」と京山に言う。

しかし京山は「戯作を書く気はあるけれど、板元が二の足なれば一本綱の踏み外し、損をかけたまいものでもなし。時節を待たれよ」と言い返す。文化年間に入ると、草双紙は合巻の時代に入り、敵討ちなどの話が流行るようになっていたことがわかる。

合巻『山洞流悪玉狂言』（浮世喜楽作、歌川国丸画、文政四年（一八二一）刊）は、草双紙での善玉悪玉の流行が落ち着いた時期に出されている。この作者の浮世喜楽とは、京伝作品の筆耕をつとめていた橋本徳瓶という人物である。注17  
序文に「予日骨董店上に一本をえたり。堪忍袋緒の善玉と題す。こは今年より三十年先寛政の始のころ大に世におこなはれ、彼の先生の著述数百部中殊更秀たるものならし」と書かれており、『堪忍袋緒の善玉』を手に入れて、趣向を得たことがわかる。また



図8 歌川豊国画「浮世歌太夫の水鏡」

早稲田大学演劇博物館所蔵 001-0145

一ウ二オには、「此図は、寛政の始、京伝先生の著述堪忍袋緒縮善玉といへる草紙の後編の巻首に出たるを、其假模写して好事の一笑にそなふるのみ」とあり、悪玉が踊る姿が描かれている(図7)。悪玉が扇子を持つて踊る姿や、悪の面をした遊女が描かれていることから、後述する歌舞伎の悪玉踊りの流行が影響して作られたことも考えられる。

寛政期を中心とする草双紙では、京伝をはじめ、京伝の善玉悪玉に影響を受けた戯作者たちが、善玉悪玉を用いた。また、顔の文字を「心」などに変えたキャラクターも描かれている。他にも「運、智」などを顔の字に書き入れており、抽象的なものを擬人化するために善玉悪玉のキャラクターが用いられていることがわかる。

### 第三章 歌舞伎

『心学早染草』の理太郎が遊郭で遊んでいる場面の中には、悪玉が扇子を持つて踊っている様子が描かれた。また『堪忍袋緒善玉』三ウ四オにも、同じように悪玉たちが踊る場面が描かれている。このように扇子を持つて踊る悪玉の姿は、のちに歌舞伎に取り入れられることになる。

『心学早染草』刊行から約二十年後の文化八年三月、市村座の『「じこいせわ浮世歌太夫」の二番目大切「七枚続花の姿絵」』で、三代目坂東三津五郎が七変化のうちの一つに願人坊主役に扮し、悪玉踊りを踊った。『歌舞伎年表』(岩波書店、一九六〇年)によると、「此内、願人坊主、手桶をぬき、丸の内に悪といふ字をくわへて悪玉おどり大出来」との評判が書かれており、「悪」と大書した丸い面を被った三津五郎が、大当たりを取ったことがわかる。浮世絵にも悪の面と扇子を持った姿が描かれている(図8)。しかし、興行前に配られる辻番付や、興行中に芝居茶屋などで売られる絵本番付をみると、七変化の役はそれぞれ描かれているが、願人坊主は悪と書かれた手桶を持つていない。注18おそらくこれらは、興行で人気を博す前に作られたため、悪玉踊りの様子は描かれていないのだろう。

この悪玉踊りが好評を博し、文化十二年には、振り付けの図解書『踊ひとり稽古』(藤間新三郎著、葛飾北斎画)が刊行され、その中の一つに悪玉踊りが収録されている。注19本書は、はじめに歌詞が書かれ、その後九丁に渡って歌に合わせた振り付けが細

かく図解されている。歌詞が常磐津「願人坊主」の一部と一致するところや、著者の藤間勘十郎は文化八年の悪玉踊りを振り付けした人物であることから、本書は文化八年の悪玉踊りを図解していると考えられる。人氣があつたようで、天保六年（一八三五）には再板されている。

第二章で挙げた合巻『山洞流悪玉狂言』の悪玉踊りをしている図7の場面には、「とんびからすにならるゝならばとんで行たやぬしのそば」と書かれているのだが、これは『踊ひとり稽古』に記されている悪玉踊りの歌詞の冒頭部分であり、常磐津「願人坊主」の詞章である。歌舞伎踊りが好評を博したことに加え、『踊ひとり稽古』によつて歌詞や踊りが広く知られていたことがわかる。

『山東京伝一代記』も、この坂東三津五郎の悪玉踊りが大当たりを取ったことに触れ、これ以降、「所々神事俄などにも是に擬しておどりなし」と所々の神事や、素人が行う俄狂言でも悪玉踊りが踊られたことが記されている。往来物『教訓宝入船』（作者未詳、江戸後期刊）には、悪の字の面を付けた者が三味線に合せて踊る様子が描かれている。三味線を弾く二人も悪の面を付けており、悪玉踊りが歌舞伎だけでなく庶民にも広まっていたことがわかる。

以下は天保以降の興行だが、歌舞伎踊りに限り続けて述べることにする。浅草寺の祭りに三社祭があるが、この三社祭という通称を持つ歌舞伎の演目は現在でも上演されている。その初演となつたのが天保三年三月の中村座「桜時女行列」の二番目

狂言「弥生花浅草祭」である。ここで四代目を襲名した坂東三津五郎の善玉、二代目中村芝翫の悪玉踊りが大当たりをとつた。辻番付には演じる二人の胸のあたりからふきだしが出ており、煙管をくわえて座る善玉と、扇子を持って踊る悪玉が描かれている。興行の前から、悪玉踊りが目玉の一部になっていたことがわかる。また絵本番付にも、漁師姿に変えられているが、辻番付と同じようなポーズをとつた善玉悪玉が描かれている（図9）。

浮世絵では、漁師の姿で「善、悪」の面と扇を持って踊る姿が描かれている。また、同じ興行を描いた図10では、それぞれの役者の手を引く善玉と悪玉も描かれている。

弘化四年（一八四七）四月に河原崎座で上演された「福聚海駒量伝記」の二番目大切「時翫舞浅草八景」でも、悪玉踊りがなされた。『黄表紙年表』（岩波書店、一九六一年）には「大切、甚五郎所作、和歌三神といふ漁師三社の見得、引拔善玉悪玉のをどり、近年の大出来大々当り」とある。辻番付には武成、浜成という漁師が漁をしている場面が描かれているが、絵本番付には、彼らが善と悪の面を持つ姿も加えられている（図11）。武成が扮する善玉は二代目市川九藏、浜成の悪玉は、天保三年の際にも悪玉を演じていた二代目中村芝翫が勤めている。この年に既に四代目中村歌右衛門を襲名していたため、襲名後にも引き続き悪玉踊りを得意としていたことがわかる。浮世絵には歌川国芳の描いた作に善玉悪玉の踊りを見ることのできる（図12）。



图9 絵本番付「桜時女行列」早稲田大学演劇博物館所蔵 イ13-00293-0169\_006



图10 歌川国貞画「弥生の花浅草祭」早稲田大学演劇博物館所蔵 101-6658、101-6660



図11 絵本番付「福聚海駒量伝記」早稲田大学演劇博物館所蔵 □23-00002-0272\_006



図12 歌川国芳画「時翫雛浅草八景」早稲田大学演劇博物館所蔵 101-6643

国芳はこの悪玉踊りを達磨に踊らせた「道外だるま玉尽」という作も描いている。<sup>注25</sup>制作年代は不明だが、名主印が二つ押されていることから弘化三年十二月から嘉永六年（一八五三）十二月までの制作かと推定される。書き添えられた唄は玉の付く語が集められている。

玉はかづ／＼いく品も あめでふく玉くじやく玉 日々ぶ  
ら／＼なまけてこまる玉 それ善玉悪玉狸ん玉 あたまに  
夜光玉ひかり舂 目玉屁の玉お手てん玉 金玉さアきなせ  
へ

玉の付く言葉を並べた流行唄のようである。天保期から幕末にかけて作られた双六にも玉尽くしの中に善玉悪玉を取り上げ



ている例があり、言葉遊びのようにも用いられていたことがわかる。絵では三人の達磨たちが善と悪の面と扇子を持って踊る姿が描かれており、その顔は役者似顔のようで、手前の達磨は四代目中村歌右衛門のように見える。達磨たちが遊ぶ様子と唄が書かれた作品は他にも数点確認でき、国芳も達磨をモチーフにした作品を残していることから、達磨は当時人気があったのではないかと思われる。

安政二年（一八五五）五月には、市村座にて「五人男誦膳契狭」の大切、浄瑠璃「三幅対戯場彩色」の中でも悪玉踊りがなされた。これは天保三年の善玉悪玉の踊り部分を、清元から常磐津に改調したもので、詞章はほぼ同じものである。辻番付や絵本番付には、悪玉踊りの場面は描かれていないが、漁師の浜成・武成とその頭上に善悪の文字が書き込まれている。浮世絵にも漁師の二人が櫂を持ち、見つめる虚空に善と悪も文字が浮かぶ場面を描くものがある。また、天保三年「弥生花浅草祭」の悪玉踊りを描いた浮世絵と、踊る二人のポーズが類似する作品がある。三枚続きの浮世絵の両端上部の窓に、善玉悪玉の面を持った二人が描かれている作品もある。大きく描かれている三人は、「三幅対戯場彩色」の主要登場人物で、右から不波伴左衛門、新道家橘、名古屋山三だが、不波伴左衛門演じる初代中村福助が悪玉、名古屋山三演じる初代坂東竹三郎が善玉を踊った。

「喜の字つくし 北山口」（国貞画、文久元年（一八六一））は、興行に合わせて作られた作品ではなく、様々な歌舞伎の場面を

描いた「喜の字」尽くしのシリーズ物の中の一つである。十三代目市村羽左衛門の善玉と四代目中村芝翫の悪玉が描かれている。

「俳優芸評 善悪両道意写絵」（文久二年頃か）も、興行を描いたものではない例で、上段に歌舞伎役者の評が書かれ、その下には役者と共に善玉悪玉が描かれているという作品である。

以後明治に入ってからには現代に至るまで、漁師の浜成・武成扮する善玉悪玉の踊りは、三社祭の通称で数多く上演された。『心学早染草』の遊興場面でも描かれた扇子を持って踊る悪玉の姿は、文化八年に三代目坂東三津五郎によって歌舞伎踊りに取り入れられた。この文化八年の悪玉踊りは悪玉のみであったが、天保三年「弥生花浅草祭」で善玉と悪玉の二人が踊る形が定型化し、以後この形が現代まで続いている。

### おわりに

以上を改めてまとめておきたい。寛政期から文化を経て文政期までを見てきたが、京伝の生み出した善玉悪玉は、早くに浮世絵と草双紙に取り入れられた。寛政期の浮世絵では遊郭を舞台とした美人画の中に描かれ、客や遊女の心情を善玉悪玉を用いることで表現した。寛政期を中心とする草双紙では善玉悪玉だけでなく、顔に様々な文字を入れて用いられた。これにより善玉悪玉のキャラクターは、善と悪だけではなく、抽象的な事物を擬人化する際に便利なツールとなったのである。

その後、黄表紙から合巻の時代に入り、草双紙での流行が落ち着いてきた文化期に、歌舞伎踊りとして取り入れられた。草双紙と歌舞伎は、善玉悪玉の持つ擬人化の記号としての特性や悪玉踊りといった特徴を、それぞれの分野で取り入れていったのである。

#### 付記

本稿をなすにあたり、図版掲載のご許可を賜りました各所蔵機関に深く御礼申し上げます。なお、天保から幕末までの作品については、拙稿『心学早染草』善玉悪玉の影響―天保から幕末まで―（『学習院大学人文科学論集』二三号、二〇一四年十月）をご参照頂ければ幸いです。

#### 注

- 1 『原色浮世絵大百科事典第十一巻 歌舞伎・遊里・索引』（大修館書店、一九八二年）六四頁。図版もこちらを参照されたい。
- 2 『チュエリッヒ・リートベルグ美術館 浮世絵名品展』奈良県立美術館、一九九三年）「善玉悪玉青楼遊興図」一三六頁解説。
- 3 図版はポストン美術館ホームページ「Good and Evil Influences in the Yoshiwara」(Accession Number:21.7541-3) 参照。
- 4 棚橋正博他注解『新編日本古典文学全集七九 黄表紙

- 5 川柳 狂歌（小学館、一九九九年）一八六頁頭注。
- 6 『続燕石十種 第二』（国書刊行会、一九〇九年）。
- 7 図版は大英博物館ホームページ (Museum number: 1906.1220.0.246) 参照。
- 8 『原色浮世絵大百科事典第四巻 画題』（大修館書店、一九八一年）九〇頁。長喜の「善玉悪玉（間錦三枚続と柱絵とあり）」と、後述する栄之の「善玉悪玉青楼遊興」が作例として挙げられている。
- 9 ポストン美術館ホームページ「The Good and Evil Influences」(21.73746)、樽崎宗重編著『秘蔵浮世絵大観十 ジェノヴァ東洋美術館』（講談社、一九八七年）、『キョッソーネ東洋美術館所蔵浮世絵展』（神戸新聞社、二〇〇一年）「善玉悪玉青楼遊興」解説参照。
- 10 『心学早染草』の時点では、本文では「よきたましゐ、わるたましゐ、あくだましゐ」などと表記され、善玉悪玉という名ではなかった。二編目「人間一生胸算用」の角書には「悪魂後編」と書かれているが、本文中で善玉悪玉と表記されるのは、三編目の『堪忍袋緒へ善玉』からである。
- 11 前掲『キョッソーネ東洋美術館所蔵浮世絵展』の作品解説に「店の宣伝のために松葉屋が制作を依頼したと思われる」との解説がある。
- 12 京伝の黄表紙図版は、『山東京傳全集 黄表紙』（第一―五巻、ぺりかん社、一九九二―二〇〇九年）参照。

- 12 棚橋正博『黄表紙総覧 中篇』（青裳堂書店、一九八九年）五〇三頁。本書では、善玉悪玉に類似したキャラクターが登場する作品について指摘している。なお、棚橋氏は小人についても善玉悪玉の趣向として挙げている。
- 13 齊藤千恵『黄表紙 忠臣蔵壁楽書 人唯一心命』描かれた演出―（『論究日本文学』八二号、立命館大学日本文学会、二〇〇五年五月）によると、文中では二種類の括弧を用い、へでは主に浄瑠璃正本から登場人物の台詞やそれをもじった台詞などで、登場人物の表面上の動きを表わすのに対し、へでは登場人物の心の動きを表現しているという。
- 14 本田康雄『式亭三馬の文芸』（笠間書院、一九七三年）五七頁。
- 15 棚橋正博『黄表紙集 絵本東土産』について（『近世文芸』二七号、一九八二年十一月。後に『黄表紙の研究』へ若草書房、一九九七年）に収められた。）
- 16 津田眞弓『山東京山年譜稿』（ぺりかん社、二〇〇四年）一二五―一二六頁、同『江戸絵本の匠 山東京山』（新典社、二〇〇五年）一二九―一三一頁。図版は『江戸絵本の匠 山東京山』一二九頁に掲載されている。
- 17 注12棚橋書、一二二―一二三頁。
- 18 図版は早稲田大学演劇博物館近世芝居番付データベース、辻番付（ロ22-00050-074）、絵本番付（ロ23-00001-0337）参照。なお、歌舞伎の番付には、演目や配役が鳥
- 19 居派の役者絵と共に描かれた一枚摺の辻番付や、狂言の一幕一幕を絵で表わして傍らに役者名と配役を記した絵本番付、役者の名前や家紋、配役を書いた役割番付などがある。辻番付は興行前に馴染みの店に配布されたり、貼られたものであるのに対し、絵本番付や役割番付は興行中に劇場や芝居茶屋で売られた。
- 20 『日本舞踊全集 第一巻 演目解説Ⅰ』（日本舞踏社、一九七七年）二四五頁。
- 21 図版は『絵図集成近世子どもの世界 絵図編第一巻 子ども・手習い』（大空社、一九九四年）三〇六頁参照。
- 22 図版は早稲田大学演劇博物館近世芝居番付データベース、辻番付（ロ22-00041-181）参照。
- 23 図版は早稲田大学演劇博物館浮世絵閲覧システム「弥生の花浅草祭」（101-6647、101-6638）参照。
- 24 図版は早稲田大学演劇博物館近世芝居番付データベース、辻番付（ロ22-00032-011）参照。
- 25 国立歴史民俗博物館蔵資料データベースホームページ「道外だる満玉尽」（資料番号H-62-17-45）参照。
- 26 『日本戯曲全集第二十七巻 歌舞伎篇』（春陽堂、一九二八年）四一五頁解説。
- 27 図版は早稲田大学演劇博物館近世芝居番付データベース、辻番付（ロ22-00019-003）、絵本番付（ロ23-00001-

- 0934) 参照。
- 28 図版は早稲田大学演劇博物館浮世絵閲覧システム「三幅対戯場彩色」(101-6644、101-6645)参照。
- 29 図版は『国立劇場所蔵 芝居版画等図録一』(国立劇場、二〇〇六年)三一頁参照。
- 30 図版はポストン美術館ホームページ(11.44187a-c)参照。
- 31 図版は早稲田大学演劇博物館浮世絵閲覧システム「喜の字つくし 北山口」(006-3601)参照。
- 32 図版は早稲田大学演劇博物館浮世絵閲覧システム「俳優芸評 善悪両道意写絵」(012-1105～1107／012-1234～1236)参照。